

平均最低気温表

月 旬 年	11 月			12 月			1 月			2 月			3 月			4 月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
32年(度)	8.6	10.3	9.2	6.0	4.6	3.0	4.1	2.9	3.0	3.7	-0.7	0.9	4.5	3.0	2.8	6.6	8.9	12.9
33年(度)	—	—	—	—	—	—	2.1	3.1	0.9	3.6	0.7	3.4	1.6	6.2	5.0	9.7	6.6	12.3

6. 当地方は殆んど毎年降霜降雪があり、明治36年—昭和32年迄の統計によると、初霜11月下旬、終霜3月下旬、初雪12月6日、終雪3月9日となっており、気温は右表の通りであります。而してユーカリ（ロブスタ）にとっては、高温は問題でなく、その低温度こそが生育を決定するカギなのであります。然も11月に入つても新芽の発生とその伸長は極めて旺盛であることが観察されます。従つてこの実状から考えまして、生育の休止期は11月下旬乃至3月下旬、特に1月乃至3月の間にしぼられます。これによつて見ても、わかりますように、ロブスタ種はその生育限界のかなり広いことが確認されるわけであります。この点から考えて、福岡、佐賀、長崎、大分各県で、冬期北風を受ける地帯を除く平地、瀬戸内海沿岸、高知、和

歌山、三重、愛知、静岡、神奈川、千葉各県の南風を受ける平地等は造林して成功を得るであろうと思われます。即ち外来樹種としてのユーカリ（グロブラス）の造林では既に事業として御坊地方において顕著な実例を示し、アカシア、モリシマは福岡県下や、天草地方において夫々驚異的な成功をおさめております。その他、広葉杉、ポプラ、台湾桐、松類なども絶えざる造林技術上の工夫研究と努力によつて、必ず事業として成功することは疑いの余地がありません。従つて、これら外国樹種導入の前途は明るく、それによつて我国の林力増強が期待されるのでありますから、試験と併行して事業化することを怠つてはならないと思ひます。

45. ヒノキ挿木事業化について

佐賀管林署 田 中 豊

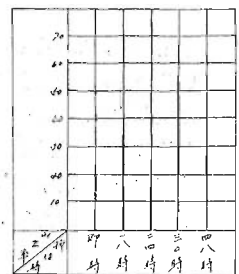
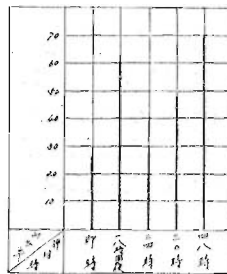
一昨年、昨年の挿木試験の結果、本年は3回目として、ただ単に試験というより本数多く事業的に果して行けるか、即ち事業化試験を行つたのでこの結果の概要を発表する。

記

1. 試料 出水管林署大久保苗畑の実生1年生
2. 方法
 - (イ) 山出用苗木実生1年生から1本乃至2本の横枝を切り取り穂長大体25糎とした。
 - (ロ) 挿付月日及び本数は図表の通り。
 - (ハ) 挿付け後は直ちに地上高30糎に日覆いをなし6月初め80糎に日覆を高くし10月1日に除去。
 - (ニ) 昭和33年11月11日掘取り調査に従事。
3. 結果 別表の通り。
4. 考察昨年500本試験の結果は73%、本年72%、しかも2万3千本の結果までであるのでヒノキ挿木事業化実施可能の自信を深めた次第である。出水管林署54に林小班昭和33年1月30日ヒノキ挿木苗圃栽地に同年11月11日生育状況調査に行くと、実生

ヒノキ処理
(グリーンナー5倍液)

無 処 理



苗と比較して良好だとはいえないがこの後の生育を期待した次第である。昨年の発表の時、私は採穂と挿付けとの時間の間隔が問題であろうと思料されると申上げたがこの点はそうは言えないことがわかつた。即ち即日挿付23%、18時間経過34%、24時間経過16%、30時間経過54%、48時間経過46%となつたからである。この結果が若し正しいと仮定すれば即日挿付けより寧ろ幾時間か経過後がよろし

いように思料された。勿論これは僅かに 50 本宛の試料であるので断言できず、この点はなお試験を行う必要があるように思料された。山行前の実生苗の横枝を切り取り穂長は少くとも 25 穂以上とする。そうでないと地上高 30 穂以上の苗木即ち山行苗の養生は困難である。この点穂長 25 穂以上の採穂可能な山出苗養成が重要である。若し穂長 25 穂未満であればこれが山行苗 30 穂以上のものとなり得ない。従つて床替が必要となる実生苗は 1 平方糎に 800 本程度養成できるのに挿木では 1 平方糎 150 本程度しか養生できないので実生の場合より 5 倍程度の畑地を必要とすることとなる。次に母樹が事業的に 1 年生に限定されるか否か、即ち薬剤処理その他の処理によつて他の年令の母樹から採穂したもので実現可能ではあるまいかは今後試験を続行したい。

5. 結 論

(1) ヒノキ山出苗からその横枝 25 穂以上の長さのものを切り取つて挿付ける。

(2) 日覆を行う。

以上を実施すれば事業的に失敗はしない。この度は結局 2 回目試験の確認の意味から行つた事業化試験である。

最後になつたが本試験は出水営林署の御協力のたまものであることを申し添える。

第 1 表

号	挿 付 本 数	挿 付 月 日
1	2,415	32. 11. 20
2	2,445	
3	2,465	32. 12. 22
4	2,820	
5	2,250	32. 12. 24
6	2,790	
7	2,535	32. 12. 12
8	2,760	
9	2,730	33. 1. 10
計	23,210	

第 2 表

調査月日 33. 11. 11

種 類	本 数	%
山 出 苗	16,818	72
床 替 苗	4,088	18
枯 損 苗	1,595	7
損 傷 苗	201	1
こ ぶ 苗	508	2
計	23,210	

46. グリナー試用について

佐 賀 営 林 署 田 中 豊

挿木用スギ、ヒノキを採穂した場合吸収作用は中絶しているから、蒸散作用と吸収作用の均衡が破れるので穂は衰弱する。従つて発根率が悪くなり、又成長が悪くなることが考えられる。故に蒸散作用抑制剤としてグリナーをスギ、ヒノキの挿穂に試用したのでその結果の概要を發表する。

1. 試 料

出水営林署大久保苗畑のスギ採穂林 5 年生から採穂した雲通、飢肥、メアサ及びヒノキ実生 1 年生の横枝からとつたヒノキ挿穂各 50 本。但し雲通は各 30 本。

2. 方 法

水 1 升到グリナー 2 合、即ちグリナー 5 倍液を挿穂の地下に挿す部分にかからぬようにして葉部に如露で散水し挿付けた。降雨があるとグリナーはとけ

て流れるので挿付後 1 週間は少くともグリナーが葉部にある様に降雨後散液した。

3. 考 察

この試用はあまりにも少数の試験であり、且つスギの場合あまりにも山出率が悪く発表できるような結果でなく、又ヒノキの場合穂長が 20cm 内外の短穂であつたので山出率が悪く、勿論最初から処理、無処理との比較が唯一の目的であつたので、まずい結果ではあるが敢えて發表することとした。

(イ) スギ の 場 合

(A) 山出率はグリナー試用の場合、無処理より概して良好であつた。ただメアサ即日挿しの場合は無処理の方が良好であつた。

(B) 地上高は全部 1 ~ 2 cm の差で試用の場合が無処理の場合より良好であつた。